

障害の発見が遅れた子どもの教育相談

——母親指導を中心に——

比 護 賢太郎

1. はじめに

子どものことばの発達が遅れていることに気づいた母親は大きな不安に落ちいる。そして、発達の遅れている原因を知って、遅れを速やかに取り戻そうとする。しかし、原因を的確に把握しないで対応を誤ることになれば、子どもの障害を一層助長する。

本事例は、視覚障害（遠視）児の障害の発見が遅れたため、言語の発達、社会性の発達等に二次的障害をもたらした事例である。本児の視覚障害が発見されたのは、生後3歳10か月である。その間、遠視によるハンディキャップのため、正眼の子どもと違う行動をとらざるを得なかった状態を関係者は、どのように理解し、対応してきたか。また、遠視が発見された後、本児に対する評価が新しい観点で見直しされたが、障害の改善に向けてどのような対応がなされたかを知り、この段階で本児が、必要とする学習内容を洗い出すことにした。続いて学習内容を具体的にとらえ、本児の生活のいかなる場において誰が指導に当るかを検討した。そして、本児が、小学校入学を迎える3月末までを1つのくぎりに約3か月、母親を中心に進めた教育相談の一端を報告する。

2. 事例の概要

(1) 対象児

T, T（男）昭和55年12月生

(2) 家庭状況

父、母、姉（小6）、本児の4人家族

(3) 生育歴

母親28歳時に第3子として出生

・＜胎生期＞

在胎月数 11か月

・＜周産期＞

吸引分娩、難産、生下体重 3,160 g、泣き方・乳の吸いつき弱い。

・＜乳児期＞

おしめのしつけ遅れる。発育悪い。首のすわり3か月。はいはじめ8か月。歩きはじめ1歳2

か月、偏食、小食、母乳をあまりのまない。

・＜幼児期＞

発育、悪い。知恵つき遅い。友だちと遊ばない、おもちゃの車で一人遊びをする。指しゃぶりが激しい、ぐずぐずしている、行動が遅い。

・＜障害に気付いた時期と状態＞

3歳になってもことばが話せない。

5歳11か月（昭和55年12月29日）医師の勧めで本教育センターを訪れる。

3. 初回時における様相

(1) 主 訴

- ・思ったことが、言葉でまとまらない。
- ・はっきり言える言葉が少ない。
- ・消極的で他人に頼る気持が強い。
- ・＜医師の紹介状の要旨＞診療上は全く問題なく、DQ（津守式精神発達質問紙）は、全体に1年程度の遅れがある。県立教育センターで言語訓練をしてほしい。

(2) 本児の状態

- 1) 運動面、動きが緩慢、ときどきはしゃぎ、その場でとびあがる。とびまわることはない。
- 2) 感覚面、主訴からは視覚障害に関する情報は得られなかった。分厚いレンズの眼鏡をかけているので母親に尋ねた。3歳10か月はかなり強度の遠視であることが分かり、以後、月1回、専門医の診察を受け、調整している。
- 3) 言語面、＜えほんによる言語障害児の選別検査＞
 - ・概念との結びつき不十分
きりん — きる、はと — とり、うでどけい — ここにする、こいのぼり — 声を出して分かるように話す自信がない。
 - ・置きかえ、消略等の誤り
とけい — とでい、さかな — しゃかな、せんせい — しえんせい。
 - ・理解語いの不足
ブランコ、釣の場面を見ても説明できない。
折り紙を使って、山折り、谷折りなどを説明しても理解できない。
- 4) 知能面、＜療育巡回相談＞
 - ・昭和61年8月1日、田中ビネー知能検査、MA 4:10、IQ 87
今後、必要に応じて再判定することが望ましい。
- 5) 人との関係（遊び）
 - ・プラモデルを使って遊ぶ。
レールの組立てなど、てきぱきとできない。

全体と部分のつながりが理解できない。

他人の指示があればやる。

6) 全般に

- 大胆さに欠ける。
- おどおどしている。

4. 本児の学習課題

(1) 視覚障害による経験の不足を補う

- 1) 基本的生活習慣、＜食事、排泄、衣服、健康、安全＞
- 2) 国語科の具体的内容＜見る、聞く、読む、話す、書く＞

(2) 感覚のハンディキャップを自覚し、うまく使う

- 1) 体験学習＜散歩、買物、山登り、海水浴、旅行、動物飼育＞
- 2) 感覚訓練、＜プラモデル、砂遊び、自転車、畑仕事の手伝い、食事の手伝い＞

(3) 主体性を育てる

- 1) 思いきり遊ぶ、＜遊戯療法、ほか＞
- 2) 自分でする＜お使い、園に行く準備＞

(4) 指導上留意する事項として、家庭（母親）、保育園（担当）、県立教育センター（担当）で次の点を確認した。

- 1) 本児は、生後約4年間、視覚障害により、生活の基盤をなす経験が欠落している。そして、4歳以降、視力矯正を行い、右眼 0.2、左眼 0.4 であるが、なおハンディキャップを背負った生活が続いている。従って、本児の指導に当たっては、外界を丹念に確かめるための時間と条件を確保する。
- 2) ボタンがけや靴をはく行動も他の子供なみにできない。動作がのろいとか、ぐずぐずしていると言いながら、まわりの人が手出しをして間に合わせる状態が続いているために、他に頼る気持ちが定着している。この依頼心を徐々に取り除き自発性を育てる。
- 3) 遠視という障害があると、正眼児の集団に馴染みにくい面があり、不安定な心理になりやすい。ささいなことでも自我が傷つけられ、感情の変動が著しく、バランスのとれない行動になりやすい。この起伏の多い気持ちを全面的に受容できる、暖かい家族関係とのびのび学習できるクラスの雰囲気をつくる。

5. 具体的学習内容

(1) 基本的生活習慣

1) 食事

- 自分の食器を並べたり、片付けたりする。
- スプーン、フォーク、箸を使って食べる。
- こぼさないようにたべる。
- 魚のこまかい骨をより出す。
- 一人で調味料を上手につかう。
- 作法をまもって食事をする。

2) 排 泄

- 便器のまわりを汚さないで用をたす。
- 便所のいろいろな標示が分かる。
- 自分の家以外の便所も一人で使う。
- 出かけるとき、集会の前に自分から用をたす。

3) 衣服の着脱

- くつの左右を区別して履く。
- 脱いだ履物をそろえる。
- 自分の衣服や持ち物を決められた場所に置く。

4) 健 康

- けがをしたとき保健室へ行く。
- 腹痛、歯痛などを母や教師に知らせる。
- 友達がけがをしたり、体の異常なときは教師に知らせる。
- 病気やけがの治療に医薬品の必要な訳が分かる。

5) 安 全

- 交通信号に注意しながら、教師や母と一緒に行動する。
- 一人で道路を安全に歩く。
- 道路を横断するとき、左右を確かめ手をあげて渡る。
- 警報器に従って、踏切を渡る。
- 道路へ急にとび出さない。
- 交通ひんぱん道路で遊ばない。

(2) 国 語 科

1)

- 友達と一緒に、紙しばいやテレビを見て楽しむ。
- 話の筋のある簡単な絵本を見たり、読んでもらったりすることを喜ぶ。
- 自分の名まえの文字が分かる。
- 絵本やテレビなどにしばしばでてくるひらがなに関心をもつ。
- いろいろな用具を使って、なぐり書きをする。

2)

- 簡単な童話、放送、録画など楽しんで聞く。
- 教師などの簡単な指図や説明を聞いて、できるだけそのとおりに行動する。
- 話し合いの時など相手の話を終わりまで聞く。
- 簡単な伝言をする。
- 簡単な図形をまねて書く。
- 文字を書くことに興味をもつ。
- 鉛筆などを正しく持ち、正しい姿勢で書く。
- ひらがなの簡単な語句をみて書き写す。
- 自分の名まえをひらがなで書く。

3)

- 話を終わりまで注意して聞いたり、分からないときは聞き返したりする。
- 話し合いなどで、聞き手の方を向いて、はっきり話す。
- ひらがなで書かれた語句や短い文を読む。
- 進んで文字を書こうとする。
- 自分の名まえなどを漢字で書く。

4)

- ・事柄の順序をたどって経験したことを話す。
- ・人に尋ねられたときは、はっきり応答する。
- ・自分の意見をみんなに分かるように話す。
- ・「を、は、へなど」を正しく読んだり、書いたりする。

5)

- ・放送や録音の内容が分かる。
- ・場に応じた適切なあいさつや応答をする。
- ・電話で適切な応答をする。
- ・敬語を使う。
- ・句点、読点、かぎなどの正しい使い方に慣れる。
- ・よく使われる漢字の書き方や使い方が分かる。

6. 保育経過記録 — M保育園、本児担当Y・S —

昭和 62. 1

昭和 62. 3

(1) 身体的生活

- ・大便の出ることを言えないため、だまってパンツの中にしていることが、2・3度あった。
- ・ウンチを言う。
- ・午睡中、大声をあげることがあった。
- ・和式の便器に、洋式のようにしてやる。
- ・きれいな野菜など出たとき時間がかかる。
- ・ふとんカバーを1人で入れる。
- ・基本的生活習慣がまだ身についていない。
- ・最近、きれいな野菜も食べようと努力している。
- ・けじめのない面もみられる。
- ・指しゃぶりをする。

(2) 社会的生活

- ・集団になじめず、一人遊びが多い。
- ・他の子にいじめられる。
- ・保育中でも部屋を出て、ステージの上に行ったりする。
- ・いいつけにきても具体的な話がでない。
- ・他の子に比べ、遊び方が幼稚で、ついていけないらしい。
- ・他の子が、ばかにしているわけではないが、本児がそのようにみているふしもある。
- ・女兒の遊びにはいって、じゃまをするのでみんなにきられる。
- ・S君がよくいじめるので、保育園に行きたくないと言う。
- ・遊んだ後、あとかたづけをしない。
- ・遊びに入れてもらえない。他児の邪魔をする。
- ・協調性に欠ける。

(3) 知的生活

- ・幼児語が少しずつとれてきた。
- ・遊びその他に必要なことばが適切に使えない。
- ・もじもじして言えない。
- ・数は3くらいまではよく理解している。

- 聞く態度にも欠ける。
- 幼い絵をかく。
- 知識面の遅れが目立つ。
- 折り紙制作では泣いてしまう。
- 車に興味がある。
- 鉛筆のもち方、不なれ
- 車の絵は、なかなかうまい。
- ときどき大声をあげたりするがわりと目立たなくなった。
- 文字も郵便やさんごっこ等でしっかりと字を書くようになった。
- 車の本が好きでよく読んでいる。

7. む す び

視覚障害（遠視）の子どもの乳幼児期における言語発達の遅れは、4歳を超えないうちに適切な手でてを講ずることによって、とり戻すことができると言われている。本児は、ほぼその上限ともいえる3歳10か月に遠視が発見された。言語習得の初期において、視覚機能が十分でない子どもは、言語発達に大きな打撃をうける。しかし、ことばは、ひとたびできあがり、ことばの理解ができるようになれば、次の段階では聴覚が主役にかわる。ここからは視覚障害者がことばの習得において優位にたつ。本稿6保育経過記録に「文字も郵便屋さんごっこ等でしっかりと字を書くようになった」、「車の本が好きでよく読んでいる」とあるが、本児が初めて来所した3か月前には予想できなかったことであり、急激な進歩である。従って、ことばの発達の遅れについては、この3か月余の指導を継続することによって、10歳前後には、ほぼ遅れはとり戻せるように思える。本児の指導で、継続して特別な配慮を必要とする内容は、「健康・安全教育」、「社会性の育成」、「学習意欲の向上」である。また、これらと相まって本児の精神的不安から自信のもてない生活が続くことのないよう、カウンセリング的援助を一貫して行うべきである。

以上、本児の教育相談の一端を指導経過の詳述を省いて紹介した。本児、母親、保母との関わりのなかで痛感することは、障害補償の配慮がなされた後の子どもの変容が大きいことであり、障害が早期に発見でき、障害が正しく評価され、障害について適切な配慮が家族を中心になされることの重要さである。

参考文献

佐藤 泰正	視覚障害児の心理学	学芸図書	昭和49年
山口 薫	教育課程編成のために	学習研究社	昭和56年
内山喜久雄	視覚聴覚障害事典	岩崎出版社	昭和57年
原田 政美	視覚障害	医歯薬出版	昭和51年